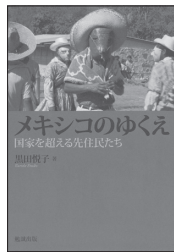


黒田悦子著

『メキシコのゆくえ  
—国家を超える先住民たち』

勉誠出版 2013年 240ページ

著者は、文化人類学者としての調査や経験に基づいて、また歴史的記述・視点を重視しつつ、近年、先住民をナショナルなもの形成のなかに置くアプローチが有効性を失いつつあること、先住民の現実がトランスナショナルな文化的共同体の形成を示していることを、国家の政策の道程と、先住民社会の変貌の両面から展望する。

第1章「国家の先住民統合政策」では、先住民に対する政策を体現してきた国立先住民庁の、2003年の国立先住民開発委員会への改組までが述べられ、第2章「国勢調査と国立人類学博物館」では、国勢調査における先住民の言語へのこだわり、博物館の最近の展示における先住民像の「伝統」への凍結（歴史不在、現実からの乖離）が指摘される。これら、国家による先住民に対する政策、把握、表現を扱った2つの章に、先住民社会にさまざまな側面から迫る3つの章が続く。

第3章「グローバル化時代の先住民社会の変容」、第4章「カトリック教会の布教とプロテスタントの挑戦」、第5章「民族の運動」では、オアハカ州ミヘ民族の社会、宗教、民族運動が扱われる。これらにみられる1970年代から1990年代にかけての大きな変化が、グローバル・ナショナル・ローカルのせめぎ合いとして浮き彫りにされる。

最後の2つの章、第6章「先住民の移動とローカルな共同体・地域の変革の可能性」と第7章「トランスナショナル文化共同体へ」では、近年重要性を増している米国への移動に焦点が当てられる。先住民が国境を超え、さまざまな形でもとの村とのつながりを保ち発展させている現実を描き、その意味を考察する。

著者は、1972年にメキシコ、オアハカ州の先住民ミヘへの調査を始め、1976年にアメリカ合衆国のニューメキシコ州でメキシコ系アメリカ人の観察を始めた。その社会人類学的な現在に対する問題意識と広い視野の融合が魅力的である。 (米村明夫)

寺神戸曠著

## 『テロ！ ペルー派遣農業技術者殺害事件』



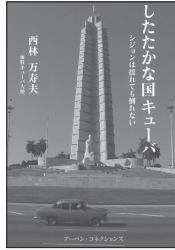
東京図書出版 2013年 144ページ

1991年7月12日、ペルーの首都リマの郊外にあるワラル市にある農業試験場で、日本人農業技術者3名がテロリストによって射殺された。本書はこの農業試験場に日本の援助で設置された「ペルー野菜生産技術センター」プロジェクトの初代リーダーによって書かれた。事件の概要のほか、プロジェクト進行の実情、背景となったペルーの社会経済状況、プロジェクトが対象とした野菜の国民の食生活における重要性、事件前後の治安の状況などについて説明している。そして終章では、この事件の責任の所在に関する衆議院外交委員会での質疑応答を取り上げている。著者の主張は、反政府テロ活動が頻発して日本の関係者が標的となったあの時期に、ペルー国民の食生活においてそれほど重要ではない野菜の生産を支援するプロジェクトを強行する理由はなかった、という点である。そしてこの事件の責任の所在がうやむやになったことに対して、強い怒りを表している。

自らプロジェクトに関わった当事者が執筆しているため、事件の経緯だけでなく政府開発援助の実態がよく理解できる。日本の援助は要請主義によって実施されることになっているが、実際には必ずしもその通りではなく、相手国から歓迎されない場合もある。援助に携わる人材の安全は派遣国、受入国の双方が守ることになっているが、今回のケースでは受入国の資金難により警備が強化されなかった。そして事件が起きた場合には、責任の所在は曖昧になってしまう。

リマに滞在する援助関係者からは、国際協力機構が関係者の安全に対して非常に細かい規則を適用しており、域内や国内で訪問できない地域が多いことに対する不満をよく聞く。この事件の経緯を読むとその理由が理解できる。それと同時に、最終的に頼れるのは自分だけで、自分の身は自分で守る必要があることを改めて感じた。 (清水達也)

西林万寿夫著

『したたかな国キューバ  
シジンは揺れても倒れない』アーバン・コネクションズ, 239ページ,  
2013年。

本書は、2009年から2012年まで駐キューバ大使を務めた著者が、着任から離任までの3年半の間に起こったさまざまな事件、キューバ人や外交団との交流の中で考えた事柄などを時系列にまとめたものである。本書の記述は、著者の着任直前に起こった革命政権の後継者と目されていた有力政治家2名の失脚に始まる。

本書では、2010年のハイチ地震の際、地震前からハイチに最も多く医師を送っていたキューバが、地震後も世界最多の医師を送ったにもかかわらず、スペインメディアに無視された話、反体制派の釈放、経済改革、オバマ政権下の米国との関係などの大きな話が半分強を占める。しかし本書ならではの味は、大使としてどの要人と関係を深めるべきか悩んだこと、日本のプレゼンスが一時に比べると低下したため、これをどう回復するかに腐心したこと、日系人墓地の再建問題や、日本との経済関係や援助についての内輪話など、大使館の内側からの視点ではないか。

キューバと縁の深い、あるいは日本大使館が日本から招聘された日本人のエピソードも興味深い。たとえば日本テレビの元社長は、フィデル・カストロに紹介されて北ベトナムに日本で初めて取材できたこと、その取材でたまたまホーチミン主席の死去に遭遇、大スクープをものにできたこと。1996～97年のペルー大使公邸占拠事件のときに首相であった橋本龍太郎氏が、当時のカストロの仲介を後年まで感謝し、2001年にキューバにフィデルを訪ね、深夜まで話し込んだことなどである。

副題にある「シジン」は揺り椅子のことで、家の前やパティオにこのシジンを出してくつろぐキューバ人の姿と、さまざまな国際環境の変化に耐えて生き延びてきた革命体制を重ね合わせている。キューバについて関心がある読者だけでなく、大使として赴任した日本人の生活が垣間見られる点で、一般読者にも興味深い読み物になっている。

(山岡加奈子)

国本伊代編著

『ドミニカ共和国を知るための60章』  
(エリアスタディーズ 122)

明石書店 2013年 295ページ

ドミニカ共和国は、カリブ海に浮かぶイスパニョーラ島をハイチと分け合い、東半分を占める国である。日本との関わりは、1934年の国交樹立に始まり、第二次世界大戦後、1950年代に実施された日本人移民の集団移住が特筆されるが、これまで同国を多角的に伝える類書は刊行されてこなかった。本書はドミニカ共和国に関する初の総合情報ガイドである。

全10章で構成され、第I章「カリブ海とコロンブスの島」と第II章「ドミニカ共和国が作られた歴史」では、コロンブス到来後のヨーロッパ人入植の歴史、隣国ハイチとの攻防、トルヒージョによる専制政治、米国の軍事介入など、決して平坦ではなかった同国の近現代史が語られている。

第III章「現代ドミニカ共和国の政治経済」では、1960年代後半に始まるバラゲール政権からメディナ現政権まで、約50年間に渡る同国の政治経済の軌跡が、第IV章「カリブの小国からグローバル化する世界へ」では、米国のドミニカ移民、1990年代以降のドミニカ経済のグローバル化、海洋国家として発展するために不可欠な港湾機能拡充の必要性など、今日的なテーマが取り上げられている。

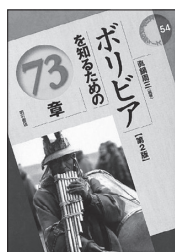
第V章「産業・企業・金融・流通」では、同国の文字通りの現状、第VI章「現代ドミニカ社会の光と影」では、社会格差や麻薬問題など、第VII章「21世紀の新しい経済と社会の構築に向けて」では、エネルギー問題や農業の多角化など、今後の同国の命運を左右する重要課題について言及されている。

第VIII章「混血文化のダイナミズム」では、ドミニカ共和国の混血文化、第IX章「消された先住民」では、イスパニョーラ島の先住民タイノ族の文化と歴史、第X章「日本とドミニカ共和国」では、日本人のドミニカ移住と日本の政府開発援助について報告されている。

随所に興味深いコラムもあり、ドミニカ共和国について詳しく知りたい方にお勧めの1冊である。

(村井友子)

真鍋修三 編著

『ボリビアを知るための73章【第2版】』  
(エリアスタディーズ54)

明石書店 2013年 424ページ

本書は、ボリビアに関する総合情報ガイドである。初版の『ボリビアを知るための68章』（真鍋修三 編著 明石書店 2006年）から7年が経過したが、ちょうど初版が出版された同じ年にエボ・モラレス（Evo Morales）政権が成立して以降、「ボリビア多民族国」という国名への変更に象徴されるように、この国は大転換を経験してきた。このような事情を踏まえて、第2版では、現代ボリビアに関する最新データはもちろん、「初版で読者に伝えられなかった重要事項が追加されている」という。特に、ここ数年の大転換をもたらした政治的な動向に関しては、本号の特集論文もご執筆いただいた遅野井茂雄氏によって2章分が追記されており、本書で「ボリビア政治の流れ」をおさらいすれば、本号で描かれた「現在のボリビア政治」の様態をより深く理解できることになるであろう。紙幅の都合により各章の詳細までは踏み込めないが、目次だけだと、第I章「自然環境とその利用」、第II章「現代の社会」、第III章「複雑な政治・外交」、第IV章「経済の変貌と現状」、第V章「歴史」、第VI章「暮らしの風景」、第VII章「芸術・文化」、第VIII章「旅への誘い」、というラインナップとなっている。「はじめに」で掲げられた本書の目的として「ボリビアという国の真実の姿をさまざまな角度から複眼的な視点や思考に基づいて構築し、重要情報を体系的に読者に提供する」こととされているが、筆者がみる限り、見事にこの目的は達成されている。このように、本書（そしてこのエリアスタディーズ・シリーズ）は非常に情報量が豊富で、（筆者のような比較政治学者には）ちょっとした調べものでも大変重宝するが、各項目は読み物としても面白く、ボリビアという国や人々について知り、「空気が」まで感じたい方には是非お勧めの1冊である。

(上谷直克)

坂口安紀 編

『2012年ベネズエラ大統領選挙と  
地方選挙：今後の展望』アジア経済研究所 情勢分析レポート  
No.21 2013年 132+viiページ

ベネズエラでは2012年10月に大統領選挙、12月には地方選挙が実施された。チャベス大統領は4選を果たしたものの、その直後にがんが再発、手術のためにキューバに向かい、そのまま新任期の就任することなく2013年3月5日に死去した。

本書は、2012年の大統領選挙と地方選挙の結果を分析するために、ベネズエラ人研究者3人の協力を得て、アジア経済研究所で実施された機動研究会の成果である。11月末から12月初めにかけてカラカスで執筆メンバー4人が集まり集中的に議論をし、各自が担当章の執筆にかかっている最中に、チャベス大統領のがん再発が発表された。チャベス大統領の病状について政府が情報を制限したため、チャベスの病状（つまり政治的展望）が不透明な中で執筆を強いられたうえ、脱稿直前にチャベス大統領が死去した。しかし、2つの選挙に関する情報や分析内容には変わりがないこと、またそれらはチャベス死去後の展望を考察するうえにも有効であることから、予定通りチャベス大統領の死去以前の内容で執筆した中間報告書が3月13日にウェブ公開された。その後、チャベス死去、再選挙、マドゥロ政権の誕生までの経緯を序章において大幅に加筆したものを、ハードコピーで発表したのが本書である。

各章では、ベネズエラの政治社会の二極化の背景としてのチャベス政権の政治変革、社会政策、経済政策（第1章）、またゲーム（選挙）のルールとしてのチャベス政権下の選挙法改正（第2章）、選挙キャンペーンの内容（第3章）、選挙結果の得票分析（第4章）などが取り上げられている。終章では今後の展望を左右する要因として、チャベス派、反チャベス派双方の結束強化／ゆるみ、国内経済情勢や国際石油価格の推移、国際社会の関与が示されている。

(坂口安紀)